9月発売　朝小読者 特別企画「言葉屋」⑦巻　先取りお試し読み 掲載

「言葉屋」とは、「言葉を口にする勇気」と「言葉を口にしない勇気」を提供するお店のこと。小5で「言葉屋」見習いとなった詠子が「言葉」との向き合い方に悩み、考え、成長していく物語です

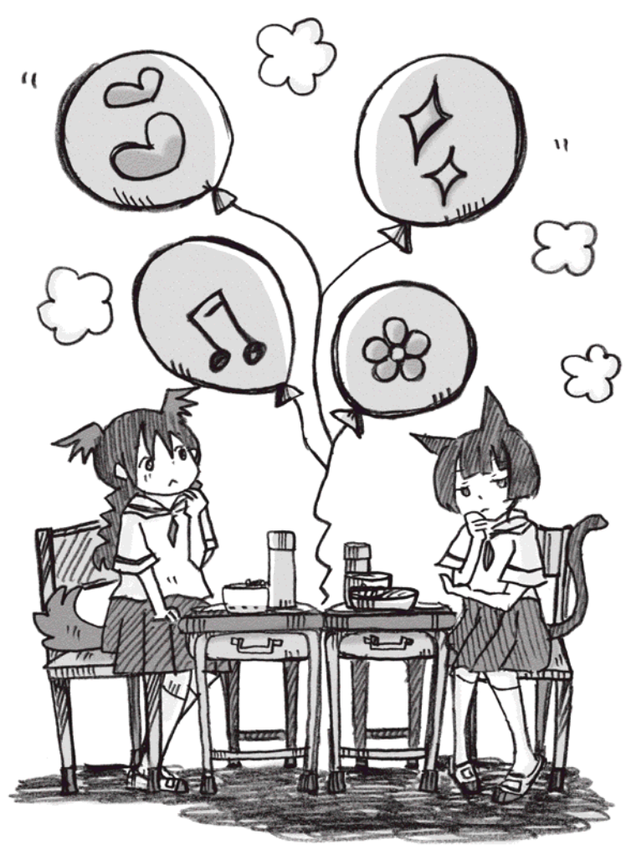
「言葉屋」第7巻は書き下ろしで単行本になります

言葉屋

（光）の追跡者たち

⑦巻

作・久米絵美里
絵・もとやままさこ



【これまでのお話】主人公は古都村詠子。小学5年生のある日、小さな雑貨屋を営むおばあちゃんの本当の仕事は、「言葉屋」だと知り、言葉屋の修行を始めます。同じクラスで、活発だけど乙女なものが好きなしぃちゃん（椎名満月）と親友になり、その幼なじみの須崎哲平くんや桐谷伊織くんとも、仲良くなります。伊織くんは別の中学校に進学しますが、秘密の貸本文通以来、詠子はやりとりを続けています。また中学1年のときに、同業「言葉屋」の子の喜多方語くんが転校してきて、仲間の輪が広がります。詠子はタロット同好会、しぃちゃんはミュージカル部所属。

第一章　毒味姫のしっぽ

「毒舌」ってなんだろう？ 友の言動にとまどう詠子

「時にことむー、毒舌とはなんだろうか」

ある日のお昼休み、お弁当を食べながら詠子の前でそう切り出したのは、ばなちゃんこと、橘明音ちゃんだった。中学一年生のころから詠子と同じクラスで、部活も同じタロット同好会。中学に入ってから、詠子が最も多く時間をともにしているといって過言ではない相手で、だからこそ詠子は今日、いつものようにふたりでお弁当を食べている最中にそう切り出したばなちゃんの表情が、いつもより少し神妙になっていることに気がついた。

元々、ばなちゃんは感情が顔に出にくい。ぱっつと短く切りそろえられた前髪や肩上の髪はつややかな黒髪で、そんなばなちゃんを日本人形やこけしのようだと称する人は少なくない。実際、詠子よりもさらに小柄で、感情の起伏があまりないばなちゃんには、いつも冷静にまわりの人間をながめている人形のようなところがあった。

だからこそ、そんなばなちゃんの表情に色がつくということはめずらしく、詠子は心配になる。しかし、

「どうしたの、急に？」

と、たずねたはいいものの、すぐにはっと気がつき、

「あ、脚本のこと？」

と、詠子はそうつけくわえた。

そう、詠子と出会う前から、ばなちゃんにはずっと、脚本家になりたいという具体的な夢があった。その熱意たるや、授業中も授業のノートの下にルーズリーフを忍ばせ、脚本を書いているほどで、タロット同好会に入ったのも、占いに訪れるお客さんの悩みを聞くことで、人間の感情や人間関係について深く学ぶためだという。

そんなばなちゃんなので、ばなちゃんの生活の中心にはいつも、「いい脚本を書くためにはどう生きるべきか」という軸があり、ばなちゃんの一挙一動はその軸に沿って決まっている。そのことを、詠子はよく知っていた。だから今回の唐突な問いかけも、今書いている脚本についての悩みなのだろうと思いいたったのだ。

しかし、詠子の問いかけにばなちゃんは、「うん、まあ」とめずらしく視線を落として口ごもる。詠子はあわてた。

しまった、せっかくばなちゃんがめずらしく相談を持ちかけてくれたというのに、思い↖こみで、ばなちゃんの口にふたをしてしまった。

それで詠子は、急いでそのふたを引っぺがす。

「なにか、あった？」

変に偽善的にも同情的にもならないように気をつけながら、詠子はなるべく平然とした声でたずねなおす。すると、詠子のそのせわしない気遣いに気がついたのか、ばなちゃんの方が、これ以上詠子を追いこむまいと配慮してくれたようで、決意の表情を浮かべ、事の顛末を話してくれた。

事の起こりは、昨日の理科の授業における実験中でのこと。実験結果が出るまで、少しの時間を持てあましていたばなちゃんたちの班は、なんとなくおしゃべりに興じていたそうなのだが、その中で、ひとりの女の子が言ったそうなのだ。

「橘さんって、毒舌だよね」と。

そして、その言葉に、ふだんからその女の子と仲のよいもうひとりの女の子もすぐに「わかるー」と同調し、もうひとりの男の子も、「あー、それ、前、誰かも言ってたわー」というなずいたらしい。それでばなちゃんは、自分が毒舌家だということが、多くの人の総意↖であることに、初めて気がついたのだそうだ。

と、そこまで話したところでばなちゃんは、なにかを考えこむような表情のまま続けた。

「それで、私は気がついた。いつの時代にもテレビの世界には、誰かしら毒舌キャラがいて、そういう類いの人々は、世間からもてはやされ、重宝されている。人々は、社会の中心に『毒舌』という存在を求める傾向にあるのだと思う。それはなぜなのだろうか。そもそも、毒舌とはなんだろうか。その真髄をうまく言語化することができれば、私も世間に受けるものが書けるんじゃないかと思うにいたった、というわけなのである」

難しい顔でうつむいていたばなちゃんが、そこでやっと顔をあげ、詠子を見つめる。

それで詠子は、少しほっとした。

やはり、悩みは脚本のことだったらしい。

と、安心したところでしかし、ばなちゃんから提起された問題は、なにやらとても難しい。確かにばなちゃんの言うとおり、特にテレビの世界で「毒舌」という言葉はよく耳にするし、そう呼ばれる人たちは番組の中心にいることが多い。そのコメントの中にあるものはまちがいなく「毒」であるというのに、見ている方はそれを待ち望んでしまう。

確かに、「毒舌」とは不思議な言葉で、不思議な役割だった。

それで詠子は首をかしげる。

「うーん……。確かになんでだろう。わかりやすい、からなのかな。毒舌って、聞いててどきっとするような言葉ばっかりで刺激的だし、ふだんの生活ではあんまり耳にしないから……。だから、テレビの世界っていう特別な場所だとコメントとして目立つし、番組をつくっている人も、つかいやすい、とか……？」

考えながら話しはじめてしまったせいで、詠子の答えははてなマークだらけになってしまう。当の詠子も、自分の口から出ていくその答えもどきにあまり納得していなかった。

しかし、ばなちゃんはそうでもなかったのか、

「そう、か。わかりやすい、か……」

と、詠子のもやもやとした声の中から、ひとつの言葉を抽出し、自分の答えの材料にしてくれる。そして、しばらく無言でお弁当のたまごやきをゆっくりと噛み、それをしっかりとのみこむと、

「ありがとう、ことむー。見えた。とても、見えたよ」

と、真剣な表情で詠子を見つめて、大きくうなずいた。

しかしその表情が、すっきり、というよりも、どこか思いつめたようなものであったことに、詠子はもっと早くに気がつくべきだったのかもしれない。「見えた」とくりかえしたばなちゃんが、次の日に詠子の前に持ってきた答えは、詠子がまったく想像していなかったものだった。

「ありがとうでれ」

「……でれ？」

次の日、これまたいつものようにいっしょにお弁当を食べようと机の位置を動かした際、ばなちゃんのぶんの机も詠子が位置を整えると、ばなちゃんはそうお礼を言った。

ありがとうでれ、と、そう言った。

聞きまちがいだろうかと、詠子が思わず聞きかえすと、しかしばなちゃんは、世の中になにもおかしなことなど起こっていないという顔をし、訂正しない。ただ、説明が必要だとは思ってくれたようで、すぐにつけくわえた。

「いや、昨日のことむーの助言により、人々に受け入れられる作品には、わかりやすさが必要だと思うにいたった。しかし、そのわかりやすさとはなんだろうと、一晩中、そして今の授業中も考え続けた結果、ここに行きついた。言葉のしっぽ、語尾。これこそ、感情表現における最高のわかりやすさだ」

「え？　えっと、語尾？　今の『でれ』って、語尾だったの？」

「そう。感謝のあまり、思わずでれっとしてしまった気持ちを、そのまま言葉にくっつけて、『ありがとうでれ』。うれしくて、嬉々としている時は、『うれしい嬉々』。悲しくて泣き出しそうな時は、『悲しくしく』。この場合はちょっと応用編で、『い』が省略される」

「えーっと、『うれしいぴょん』とかじゃ、ダメ、なの？」

「オリジナリティーがほしい。し、『ぴょん』は浮気者でわかりづらい。現に、『悲しいぴょん』も成り立つ。対して、私のしっぽは一途である」

「確かに……」

詠子が思わず納得すると、ふたりの間にしばし静寂が流れる。

その間詠子は、ばなちゃんのそのすがすがしい論破の跡地をただぼうっと見つめてしまっていたが、ばなちゃんはやがて、ふーっと長いため息をこぼすと、その地にのさばっていた沈黙を横に吹き流した。

「いや、わかるよ。舞台上やテレビの中ならまだしも、現実世界でこのしっぽの普及が無理難題であることは、私にもわかっている。ただ昨日、この世に毒舌を超えるわかりやすさはありやしないのだろうかと考えていた中で、ふとしっぽに憧れたんだ。そう、私は昔からずっと、しっぽがほしかった」

「本物のしっぽの方？」

「そう。犬は、人間ほどは顔に表情は出ない。しかし、どんなに無表情でも、ぶんぶんとしっぽをふっていれば、よろこんでいることがみんなに伝わる。そういうしっぽが、人間にもあればと、ずっと思っていた。いや、私以外のみんなは持っているような気がする。クラスのグループトークを見ていたってそうだ。だいたいの、特に女子は、とてもじょうずにしっぽを……もとい、絵文字やスタンプをつかう。ただ『ありがとう』と書くだけじゃぶっきらぼうになって全然よろこんでいるように見えないけれど、ハートマークやキラキラをつければ、とたんに感情がわかりやすくなる。本当によろこんでいるんだろうかと、相手を疑心暗鬼にさせることはない。逆に言えば、かわいいスタンプやおもしろスタンプを連打しないと、今の世の中じゃ、気持ちは伝わらないんだ」

言われて詠子は、クラスのグループトークに飛び交うクラスメイトたちの会話を思い出す。確かにみんな、特に女の子は、絵文字やスタンプをよくつかう。宇治原くんのような、クラスのムードメーカーの男の子が調子に乗ってふざけすぎた時などには、「おい」「やめて」のような言葉が単体で投げられる時もあるけれど、なるほど、確かにそういう時は本当に怒っている時で、ポジティブな感情の時に絵文字もスタンプもないというメッセージは、グループトークではあまり見たことがなかった。

と、詠子が携帯端末の中に広がる小さな教室に思いを馳せていると、ばなちゃんはそのまま続ける。

（つづく）

このつづきは単行本でどうぞ！

作　久米　絵美里
1987年、東京都生まれ。慶應義塾大学法学部政治学科卒。「言葉屋」で第5回朝日学生新聞社児童文学賞を受賞。『言葉屋　言箱と言珠のひみつ』でデビュー。他の著書に『君型迷宮図』（朝日学生新聞社刊）。

絵　もとやま まさこ
1982年、神奈川県生まれ。武蔵野女子大学文学部日本語日本文学科卒。イラスト・書籍の挿絵などで活動。詩集『夏の日』『ゴムの木とクジラ』『ぜいたくなあさ』『まどろむ、わたしたち』（銀の鈴社）などで絵を担当。

9月下旬発売

言葉屋⑦（光）の追跡者たち

朝日学生新聞社は、『言葉屋⑦（光）の追跡者たち』（久米絵美里　作、もとやままさこ　絵、税込み1188円）＝写真＝を9月20日に発売します。

言葉の光と影に向き合う

「言葉屋」シリーズは、朝小で連載して本になった『言葉屋　言箱と言珠のひみつ』（朝日学生新聞社児童文学賞第5回受賞作）から生まれた物語で、第7巻は書き下ろし作品です。

「言葉屋」とは、「言葉を口にする勇気」と「言葉を口にしない勇気」を提供するお店です。言葉屋修行中の詠子は、中学2年生の2学期をむかえます。個性的な語尾を考えついたタロット同好会の同級生ばなちゃん、突然「女子っぽい言葉」を使い始めたしぃちゃんにとまどい、文化祭のバーチャルアイドルのコンサートをめぐり、音楽と言葉の関係を考えることにもなります。年末、詠子は思いも寄らなかった言箱の使い方に立ち会い、ショックを受けます。言葉が照らしだす光と影の存在に気づき、詠子はこれからの言葉屋のあり方も考え始めます。卒業する先輩をみて、ふつうな自分に悩む詠子や、恋するしぃちゃんの姿は、共感をよびそうです。

A5判上製　232ページ　ISBN 978-4-909064-85-1

朝日学生新聞社
www.asagaku.jp
お近くの書店か、インターネット書店でお求めください。
お問い合わせは出版部TEL 03-3545-5436（月～金 10：00～18：00）